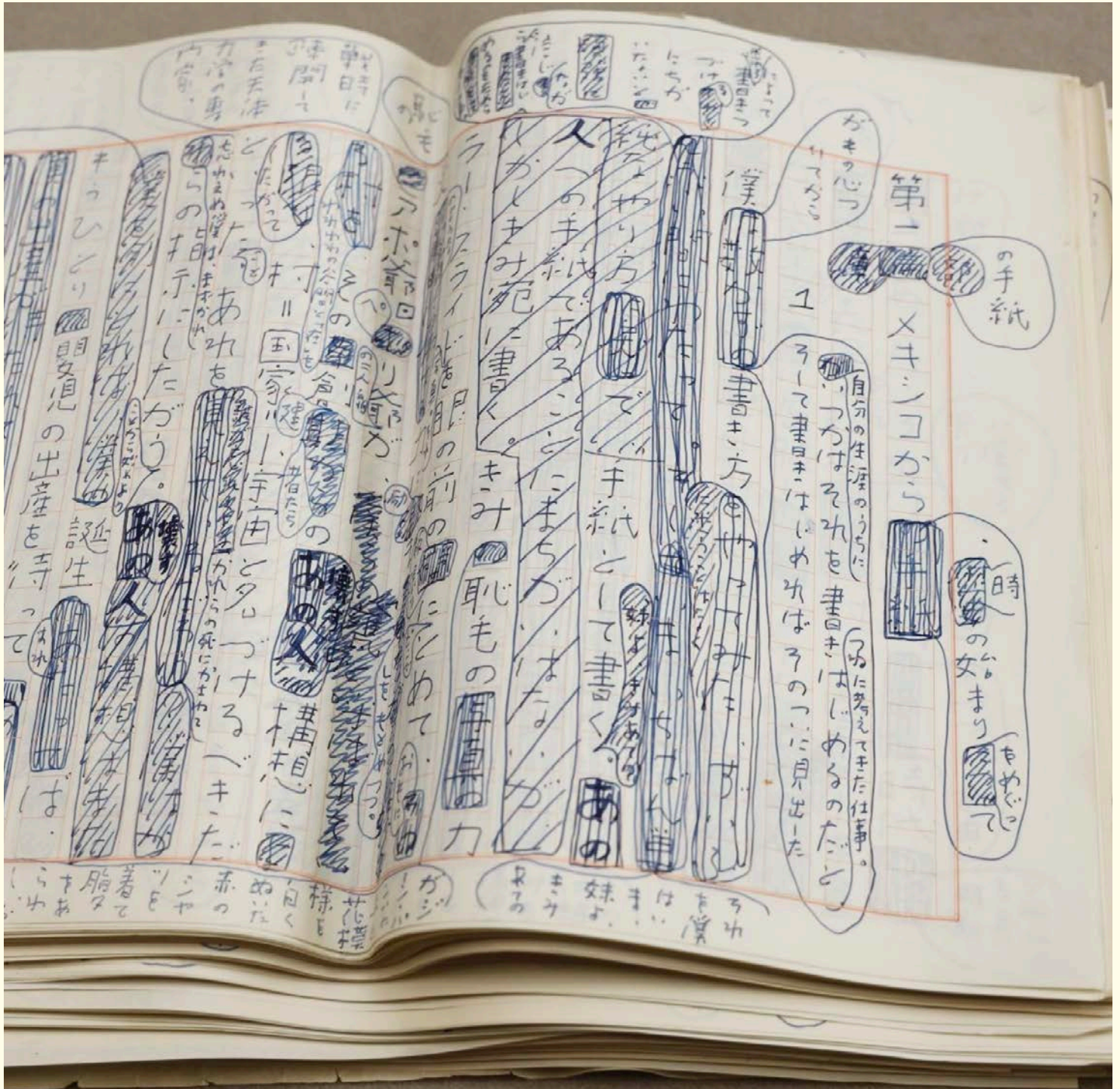


学内六報

2021.3.25

no.1544



大江健三郎氏が文学部に寄託した『同時代ゲーム』の自筆原稿



志ある卓越。 東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO

東京大学 × ソフトバンク × 人工知能 = ? Beyond AI 研究推進機構が始動

長年お疲れ様でした
令和2年度退職教員アルバム

東京大学 × ソフトバンク × 人工知能 = ?

Beyond AI 研究推進機構が
始動しました

二人の「事務局長」がトップに

林 4月からお二人が両組織のトップになるというのは偶然でしょうか。

宮川 五神総長と孫会長という二人を事務局長のように支えてきたのが我々でしたね。

藤井 2年越しで準備を進め、いよいよ始動というときに二人が組織の長になる。偶然ですが気運が高まる感じがします。

林 特に何に力を入れていきますか。

宮川 一つはスマートシティです。未来のまちづくりの議論を大学や国も含めて幅広く進めたいんです。もう一つは地方交通で、MaaS^{*}の世界観を地方創生につなげます。上場企業は株主から集めたお金を上手に運用しないといけませんから、研究という面では少し浅くなる面があります。東大と組むことでそれを深めることができるかと期待しています。

現在の延長線にないAIを

藤井 私は、いまはないAI、いまのAIの延長線上にないAIを生み出したいです。東大の学問的な強みをAIに掛け合わせて高めることに挑戦します。大学は社会に求められることを意識し、知恵を社会に活かさない、研究のアクティビティが持続できなくなると思っています。大学の知を社会に役立てることから新しいリソースを得、さらに学問も発展するという好循環を生みたい。専門分野を深く掘り下げることと社会の要請に幅広く応えることの両輪を回していきます。

林 東大の強みとはどういうものですか。

藤井 特定の専門分野を持つ研究者がいることと、幅広い分野の研究者がいることです。だからこそ、AI活用の際に生じる倫理の問題をはじめとして、社会への影響力を具体的に考えられるわけです。

宮川 同じAI研究でも、企業と大学で

特別対談 @SHIBUYA QWS



情報学環教授
Beyond AI 研究推進機構
林 香里

理事・副学長
Beyond AI 研究推進機構長
藤井輝夫

ソフトバンク株式会社
代表取締役
副社長執行役員 兼 CEO
宮川潤一さん

は色が違うと感じます。東大の先生の話を受けていると「そう来たか!」と驚かされることがあります。企業では思いもつかなかったことを本気で進めていたり、逆に企業ですですでに普通にやっていることがあったりもして、その辺の掛け算が面白い。足し算より掛け算、いえ、べき乗の世界だなという感触があります。

林 AIのダイバーシティですね。一方で、AIには様々な懸念もあるかと思えます。

藤井 企業、大学、行政と立場により様々な見方があります。テーブルにそれを出して共有することが重要です。AIを研究するだけでなく、懸念も含めてオープンに議論する場となるのが、社会から共感される存在への第一歩だと思います。

林 研究倫理はよくテーマになりますが、AIだと研究者の倫理におさまらず、企業の倫理、社会の倫理も関わってきますね。

宮川 AIが社会の基盤になるには公平性が必須です。一部の詳しい人だけが富を築いたり権力を得たりするのではなく、人類をもっと自由にする技術がAIであるべき。AIを使ったサービスを提供する企業がしっかり制御しないといけません。

藤井 AIが安心して使えるために何が必要かを研究者もしっかり議論しないといけない。今回そうした場ができたことで技術もしっかりしていくと思います。

宮川 進化を恐れてはいけませんけどね。

林 ソフトバンクで開発している最先端のAI技術はどんなものがありますか。

digital-twinを竹芝で実現

宮川 年末に引越した竹芝のスマートビルに多数のセンサを搭載しています。東京都と進めるプロジェクトの一環です。このスマートシティのプラットフォームにデジタルツインを移植したい。まさにこのテーマは機構でも提案があったところです。いいモデルになると思います。

藤井 ハードのセットアップはもうあるので、そこに何を乗せていくかという段階です。研究をすぐ実装に移すことができるコンビネーションのよさを感じます。

林 今後の抱負を一言ずつお願いします。

藤井 いままでない新しいコンセプトのAIを機構から生み出します。そして、ここから生まれたAIが社会に活用され、社会に浸透して共感を得られるようにしたい。私の思いはこの二つに尽きます。

宮川 AIを超えたAIとは何かを探り、AIの未来を見たいんです。未来のAIを担う人材の育成も機構を通じて進めたい。日本がAIで周回遅れというのは機構の活動を通じて過去の話にするつもりです。

林 たくさんの人が共感をもって応援してくれるような機構にしたいですね。

*Mobility as a Service

総長室の下に設置された Beyond AI 研究推進機構の発足記念シンポジウムが、2月20日にオンラインで開催されました。テーマは「Living with AI, Going Beyond AI」。特別対談では機構にかける思いを二人のキーパーソンが語り、パネルディスカッションでは台湾と日本を結んで AI と集合知と教育の関係が語られ、機構を牽引する研究者 10 人によるビデオ紹介も行われました。当日の様様をダイジェストでお届けします。

発足記念シンポジウム プログラム

開会祝辞：五神真、孫正義さん(ソフトバンクグループ株式会社 代表取締役 会長兼社長執行役員)



パネルディスカッション (45 分)：オードリー・タンさん、スブツニ子!さん、池内与志穂



機構紹介 (20 分)：10 人の中長期研究リーダー

特別対談 (25 分)：藤井輝夫、宮川潤一さん



閉会挨拶：藤井輝夫

司会：矢口祐人(情報学環)



機構の中長期研究リーダー10人



機構が狙うのは、AIに特化した基礎研究(中長期研究)と社会実装を念頭においた応用研究(ハイサイクル研究)のシナジー。シンポジウムでは、前者を担う10人の研究リーダーがそれぞれの研究室から研究テーマや今後の展開について2分間のビデオで紹介しました。

少ない教師データからの高精度予測モデル自動構築

原田達也(先端科学技術研究センター)



複合AIによる問題解決手法

田中純一(素粒子物理国際研究センター)



AIを使って集合知を深めれば強権発動は不要に

パネルディスカッションは日本と台湾をオンラインで繋いで行われ、司会は特別対談と同じく林先生が務めました。

台湾から参加したタンさんは、近隣店舗のマスク在庫がリアルタイムでわかる「マスクマップ」によりCOVID-19を抑え込むことができたのは、誰か一人の力ではなく社会の集合知を活用した成果であることを紹介。AIを上手に使うことで、中央政府が強権を発動する必要などはないと明快に語りました。

昨年度まで生産技術研究所で活動していたスブツニ子!さんは、過去の偏ったデータセットから学習せざるを得ないAIにはバイアスの問題が生じることを指摘。過去のデータをもとに、女性の雇用を控えるようにとの間違っただけの助言を出したり、特定人種の再犯率が高いという分析を出したりするということもあるという厄介な問題を提起しました。

生産技術研究所の池内先生は、iPS細胞から脳と同じような機能を持つ細胞をつくりだした研究成果を紹介。科学者とデザイナーがAIについて議論しながらテクノロジーに欠けているものを埋めようとするRCA+IIS DESIGN LABの取組みにも言及しました。

バイアスへの対応については、誰かが間違いを見つけたときに簡単にフィードバックができ、それを公開の場で議論するシステムが有効だと述べたタンさん。SNSでは過激な意見をAIで集めて増幅したりフェイクニュースを広げたりする動きがあるという指摘には、火事になるからと火を禁止するのではなく、正しい使い方を小さいときから教えるべきであり、よりよい社会のためにAIをどう使えばよいのかをしっかりと教育することが重要だと応答。他のパネリストも賛同を示し、大学を含めた教育の重要性があらためて確認されました。

AIによる脳機能拡張

池谷裕二(薬学系研究科)



脳活動データを活用した高信頼AI開発

大木研一(医学系研究科)



幼児の知識獲得メカニズムを活用したAI

辻晶(ニューロインテリジェンス国際研究機構)



人工脳組織を用いた脳機能解明

池内与志穂(生産技術研究所)



生体ゆらぎに学ぶ超低消費電力を実現する次世代AIデバイス

田畑仁(工学系研究科)



AIを活用した物質の量子的性質の解読

齊藤英治(工学系研究科)



AI時代における真のジェンダー平等社会の実現とマイノリティの権利保障のための規範・倫理・実践研究

林香里(情報学環)



AI×発達障害当事者研究 計算論的神経科学による認知個性の顕在化

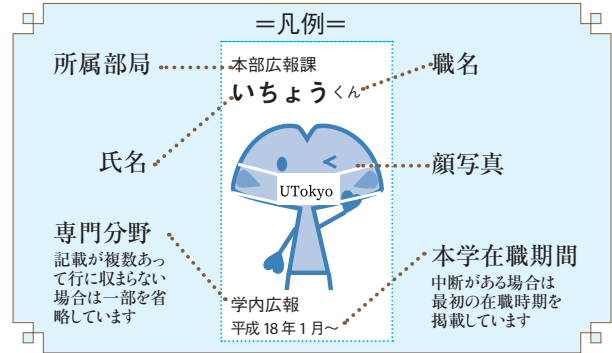
長井志江(ニューロインテリジェンス国際研究機構)



令和2年度 退職教員アルバム

お疲れ様でした & ありがとうございます!

例年、年度末に退職する教員情報について東大ポータルで提供を呼びかけ、所属部局から提出があった紹介情報をウェブ上に掲載してきました。今年度は、長引くコロナ禍の影響で顔を合わせる形の送別の宴の開催が難しくなり、最終講義も軒並みオンライン開催が普通になっているという現状に鑑み、「学内広報」誌面にも先生方のお名前と写真を掲載し、大学へのご貢献を労います。長年にわたる東大での研究・教育活動、大変お疲れ様でした。



先生方の詳しい情報はここから



<p>法学政治学研究所 小原雅博 教授</p>  <p>現代日本外交 平成 27年 9月~</p>	<p>医学系研究所 水口 雅 教授</p>  <p>小児神経学 昭和 63年 5月~</p>	<p>医学系研究所 上別府圭子 教授</p>  <p>家族看護学 平成 14年 4月~</p>	<p>医学系研究所 小池和彦 教授</p>  <p>内科学、消化器病学 平成 3年 1月~</p>	<p>工学系研究所 石原一彦 教授</p>  <p>バイオマテリアル工学 平成 10年 4月~</p>	
<p>工学系研究所 牛田多加志 教授</p>  <p>バイオメカニクス 平成 12年 4月~</p>	<p>工学系研究所 船津公人 教授</p>  <p>データ駆動型化学 平成 16年 4月~</p>	<p>工学系研究所 森口祐一 教授</p>  <p>環境システム学 平成 23年 4月~</p>	<p>工学系研究所 六川修一 教授</p>  <p>物理探査工学 昭和 60年 11月~</p>	<p>人文社会系研究所 葛西康徳 教授</p>  <p>西洋古典学 昭和 53年 4月~</p>	<p>人文社会系研究所 小松美彦 教授</p>  <p>科学史・科学論 平成 30年 5月~</p>
<p>人文社会系研究所 設楽博己 教授</p>  <p>考古学 平成 22年 4月~</p>	<p>人文社会系研究所 渡部泰明 教授</p>  <p>和歌文学 昭和 61年 4月~</p>	<p>人文社会系研究所 向井留実子 教授</p>  <p>日本語教育学 平成 23年 9月~</p>	<p>理学系研究所 相原博昭 教授</p>  <p>素粒子物理学実験 昭和 59年 4月~</p>	<p>理学系研究所 岡 良隆 教授</p>  <p>生体情報学 昭和 56年 4月~</p>	<p>理学系研究所 深田吉孝 教授</p>  <p>神経機能生化学 平成 5年 5月~</p>
<p>理学系研究所 湯本潤司 教授</p>  <p>量子エレクトロニクス 平成 26年 10月~</p>	<p>農学生命科学研究科 岸野洋久 教授</p>  <p>統計学、進化学 平成 2年 12月~</p>	<p>農学生命科学研究科 柴田道夫 教授</p>  <p>園芸学 平成 24年 4月~</p>	<p>農学生命科学研究科 白石則彦 教授</p>  <p>森林の計画、経営 平成 9年 5月~</p>	<p>総合文化研究科 池上俊一 教授</p>  <p>西洋中世史 昭和 58年 10月~</p>	<p>総合文化研究科 磯崎行雄 教授</p>  <p>地球科学 平成 9年 10月~</p>

<p>総合文化研究科 伊藤たかね 教授</p>  <p>言語学・英語学 平成元年4月～</p>	<p>総合文化研究科 岩本通弥 教授</p>  <p>民俗学 1995年4月～</p>	<p>総合文化研究科 エリス俊子 教授</p>  <p>日本近代詩・比較文学 平成4年4月～</p>	<p>総合文化研究科 寺澤 盾 教授</p>  <p>英語史 平成4年4月～</p>	<p>総合文化研究科 トウヴォス・パトリック 教授</p>  <p>日本舞台芸術 平成4年4月～</p>	<p>総合文化研究科 松尾基之 教授</p>  <p>環境分析化学 平成4年4月～</p>
<p>教育学研究科 秋田喜代美 教授</p>  <p>学校教育学、保育学 平成11年4月～</p>	<p>教育学研究科 恒吉僚子 教授</p>  <p>教育の国際比較研究 平成8年1月～</p>	<p>数理学研究科 儀我美一 教授</p>  <p>非線形解析学 平成16年9月～</p>	<p>新領域創成科学研究科 鎌田 実 教授</p>  <p>生活支援工学 平成2年4月～</p>	<p>新領域創成科学研究科 斎藤 馨 教授</p>  <p>造園学、森林科学 平成元年4月～</p>	<p>新領域創成科学研究科 佐藤 均 准教授</p>  <p>分子細胞遺伝学 平成2年10月～</p>
<p>新領域創成科学研究科 高瀬雄一 教授</p>  <p>プラズマ物理学 平成9年7月～</p>	<p>新領域創成科学研究科 堀 洋一 教授</p>  <p>電気制御システム学 昭和58年4月～</p>	<p>新領域創成科学研究科 三谷啓志 教授</p>  <p>放射線生物学 昭和61年9月～</p>	<p>新領域創成科学研究科 山口 一 教授</p>  <p>海洋情報基盤学 昭和58年4月～</p>	<p>新領域創成科学研究科 吉田善章 教授</p>  <p>プラズマ物理学 昭和60年6月～</p>	<p>医科学研究所 河岡義裕 教授</p>  <p>ウイルス学 平成11年10月～</p>
<p>医科学研究所 田中廣壽 教授</p>  <p>内科学 平成11年4月～</p>	<p>医科学研究所 東條有伸 教授</p>  <p>血液内科学 昭和63年10月～</p>	<p>地震研究所 川勝 均 教授</p>  <p>グローバル地震学 平成4年6月～</p>	<p>地震研究所 瀬瀬一起 教授</p>  <p>応用地震学 昭和55年5月～</p>	<p>地震研究所 佐藤比呂志 教授</p>  <p>構造地質学 平成3年10月～</p>	<p>地震研究所 森田裕一 教授</p>  <p>観測火山学 平成8年3月～</p>
<p>生産技術研究所 喜連川優 教授</p>  <p>データベース工学 昭和58年4月～</p>	<p>生産技術研究所 畑中研一 教授</p>  <p>糖鎖生命工学 昭和58年10月～</p>	<p>史料編纂所 久留島典子 教授</p>  <p>日本中世史 昭和56年4月～</p>	<p>史料編纂所 高橋敏子 教授</p>  <p>日本中世史 昭和57年4月～</p>	<p>物性研究所 小森文夫 教授</p>  <p>表面物理学 昭和58年12月～</p>	<p>物性研究所 榊原俊郎 教授</p>  <p>固体物理学 平成12年3月～</p>
<p>物性研究所 瀧川 仁 教授</p>  <p>強相関電子物性 昭和58年4月～</p>	<p>大気海洋研究所 川幡穂高 教授</p>  <p>地球化学 平成17年6月～</p>	<p>大気海洋研究所 木本昌秀 教授</p>  <p>気象学・気候力学 平成6年4月～</p>	<p>大気海洋研究所 佐野有司 教授</p>  <p>海洋地球化学 昭和57年5月～</p>	<p>未来ビジョン研究センター 橋本和仁 教授</p>  <p>物理化学、材料科学 平成元年9月～</p>	<p>環境安全研究センター 尾張眞則 教授</p>  <p>環境計測化学 昭和58年4月～</p>

教養教育の現場から

第44回

リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

ゲームや映像に音を付ける試みで耳の「視野」を拓ける

／耳を啓く、音を創る～感性と知性の協働のためのサウンドデザイン入門



社会連携部門特任講師
山上揚平

通常の授業と違う回路を動かす

—昨年10月のご着任ですね。今回初めて行うのはどういった授業でしょうか。

「普段レポートを書いたりするときとは別の回路を動かさせたアウトプットをしてもらう授業です。知性と感性をともに働かせて何かを創る経験を教養教育のなかでもらうのが重要だと思い、自分の研究分野に紐付けて企画しました。広い意味でのサウンドデザインを学生に味わってもらいます。音楽でなくても、一つの音色を創るのだから創作です。たとえば公共の広場における音響でもいいし、カメラのシャッター音でもいい。何かしらの意図をもって世に音をつける行為全般を想定しています。まだ音が付いていない状況を選んで音を付けるアイデアを練るのもサウンドデザインの一環です」

—車のウインカーの音に惹かれます。

「もちろんそうしたプロダクトの音も対象です。個人的にはボタンを正しく掛けると快い音がする子供服とか考えたいですね。ただ今回は半期の授業で7回しかないで、映像とゲームに絞りました。社会との接点になるのが部門の使命なので、音付けの現場で活躍する二人のプロ

に講師をお願いしました。映像は西岡龍彦さん。牟岐礼名義でNHKスペシャルなどの音楽を担当してきた作曲家で、東京藝術大学音楽環境創造科の創設者の一人でもあります。ゲームは田中治久(hally)さん。ファミコンなどに内蔵された低スペック音源チップで曲を作る「チップチューンアーティスト」で、ゲーム音楽史の研究者でもあります。各々の分野についての講義の後に音創りの課題を出してもらい、最後に学生たちが成果発表会を行います」

「技術を学ぶだけではなく、普段何気なく行っている聴取行為を考えることが重要です。学びとは新しい視点を知って世の見え方が変わる。耳の「視野」が広がるような気づきを促したいです。私は入学時は理系で、人の認知や感情の動きが知りたかったんですが、教養学部で小林康夫先生や松浦寿輝先生などの授業に出るうち、理系である必要はないと気づいて文転しました。私の授業も学生にとって何かの気づきになるといいですね」

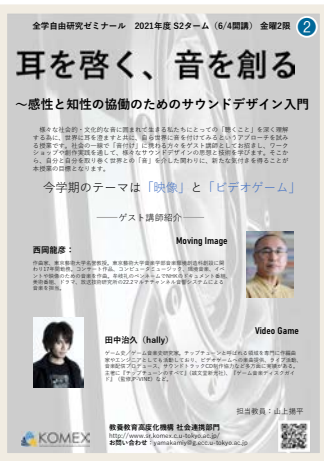
新しい「ヘルシー」を皆で考える

—社会連携部門の名物、ブランドデザインスタジオ (BDS) もご担当ですね。

「正解のない問いをチームで考えて具体的な商品やサービスの提案につなげるのもレポートとは違う回路を使うアウトプットです。初めてオンラインで行った今年度A semesterのテーマは「ヘルシー」。近年は「～な人間関係」のように「ヘルシー」が身体以外にも使われているとの分析があり、コロナ禍における「ヘルシーな○○」を学生が考えました。SNS等での情報過多から来るアンヘルシーさを解決したいという声が多かったですね」

—もう10年も続いているそうですが、形骸化の心配などはありませんか。

「もちろん手慣れてきた部分はあるでしょうが、スタッフも学生も入れ替わりまですし、広告制作の現場で使われる最新の手法が毎年導入されて刺激になっています。芸術からインスピレーションを得て議論に活かすアートシンキングとか、途中でアイデアを文字を使わずに形にしてみるプロトタイピングとか。以前この授業を履修し、いまは博報堂の社員として授業をエンカレッジしている人もいます。いい循環ができていていると思います」



①BDSの最終発表会(12月17日)で優勝したチームの資料より。一つの正しさに縛られないヘルシーな生き方を学べるよう、たとえば100m走ならその都度設定したタイムに一番近いタイムでゴールした人が勝ちとするなど、競技に複数のルールを導入しようというアイデアでした。

②サウンドデザイン入門の授業のフライヤー。



③社会連携部門では図書館の活用と膨大なデータベースの使い方を学ぶ「こまとちゃんゼミナール」も実施中。「卒業した後にも役立つスキルです」(山上先生)。

総長室だより

～ 思いを伝える生声コラム～

第30回

東京大学第30代総長

五神 真



東大144年の一コマとしての6年間

2015年4月1日、私は第30代東京大学総長に就任し、この3月31日、任期を終えます。総長としての体験をリアルタイムで皆様にお伝えするために2017年8月から始めた「総長室だより」も最終回を迎えました。今回は6年間という任期を私が今どう感じているか、お話ししたいと思います。総長任期を振り返る際、「五神時代」と表現されることがありますが、私は少し違和感があります。時代という言葉は一区切りというニュアンスが伴いますが、この6年間は東大の144年間の大きな流れの中の一コマだと感じています。

総長として様々な分野の方々との出会いがありました。その中である公的な組織のトップとの会話を思い出します。総長任期6年について、最初の2年は改革プランの立ち上げ加速、次の2年は普及拡大、最後の2年は定着と持続装置の装填、と述べました。それに対して「専門家、テクノクラートとしての組織トップがやるべきことは、任期の最終日まで、その瞬間に最善の決断を下すこと。次のために、任期期間の仕事の形を整えようとする判断を間違えかねない」と言われ、はっとしました。そもそも変化が激しい現代では、最後まで何が起きるかわかりません。また終わった後の世界も予想できません。この6年間は長い歴史の一部として溶け込んでいくのです。

例えば、濱田総長のときに学内で大議論を経て策定された学部教育総合的の改革の多くは、私の総長着任とともに本格実施となり、4ターム制、全学統一時間割、105分授業などが始まりました。学内各部署の研究者が学問の最前線の醍醐味を新入生に直接伝える初年次ゼミは、教員学生双方にとっても良い効果をもたらしています。PEAK、TLP、GLP-GEFILなど、野心的な国際化推進も濱田総長が始めたものです。現場を訪問した際の、生き生きとした学生の姿は大変印象的で、これらの取り組みがバラバラではもったいないと考え、Go Global Gatewayを始めました。学部教育改革は受け取ったバトンを定着させ発展させることに徹しました。総合図書館の歴史的改修も同じです。

このような感覚から、6年間は一つの時代というよりも、先日急逝された有馬総長の改革から法人化後の佐々木総長、小宮山総長、濱田総長による諸改革の流れの上の一コマのように感じるので。今、そのバトンは藤井先生に渡ります。時代を創るのではなく、その時々々に最善な判断を下すことに集中するしなやかさが大切なだろうと感じています。大学を取り巻く環境の激変は続くことでしょう。その変化に怯むのではなく、変化をみなで楽しみましょう。

シリーズ 第32回 連携研究機構

デジタル空間社会
連携研究機構

の巻



話 / 次期機構長
関本義秀先生

リアルタイム時空間データを解析

——空間情報科学研究センター(CSIS)が中心となって昨年4月に発足した連携研究機構ですね。

「はい。空間情報科学は空間的な位置に結びつくデータを系統的に分析する学問です。当機構は、進化するIoTデバイス経由のデータなど多様なリアルタイム時空間ビッグデータを解析・応用するための学理を構築しようと情報系9部局による連携で誕生しました。私は柴崎亮介先生を継いで4月から機構長を務めます」

——リアルタイム時空間データとはどんなものでしょう。コロナ禍で注目された人流なども該当しますか。

「まさしくCSISで2008年に「人の流れプロジェクト」を始めたのが私でした。当初は数十人規模のデータが対象でしたが、都市や国、いまでは地球のレベルまで対象が広がっています。主に携帯電話キャリアが持つGPS情報と基地局データを活用しますが、40年ほど前から自治体が蓄積してきた交通アンケート調査データなども用います。工学系や新領域の研究者が扱うのは超小型人工衛星が上空から捉えた画像データ。理学系の研究者が扱うのは現地でレーザー計測した地形情報。国勢調査のオリジナルデータとか、住宅地図の建物情報とか、不動産の価格情報なども対象になります」

——ではIoTデバイス活用のご具体例といますと？

「たとえば、スマホを自動車のダッシュボードに載せて走って撮った画像と位置情報を連動させ、道路の傷んだ部分をAIで検出する技術が進んでいます。自治体に情報を提供して保守に役立ててもらおうスタートアップを私の研究室出身の学生が起業しました。交通関連ではETC2.0の活用も期待できます。新しいETCデバイスにはGPSのチップが入っていて、料金情報だけでなく車両の位置や経路も記録しています。うまく使えば渋滞予測や道路計画などにも役立つでしょう」

「1月に行ったキックオフシンポにはオンラインで約600人が参加し、平井卓也デジタル改革担当大臣が期待を表明してくれました。世界では政治による分断が進みますが、学術という中立の観点から世界を結び直す活動を進めたいと思います。4月からは企画部局が17に増えます。人材育成の部分も進めていきます」

——ロゴと略称についてもご紹介ください。

「ロゴはDigitalとDataのDをイメージした正方形をずらして配置し、様々な分野のデータで社会がより良い未来に進むというビジョンを表しています。「デジタル空間社会」のDigital Spatial Societyを略してDSSと呼ぶことが内輪では多いですね」



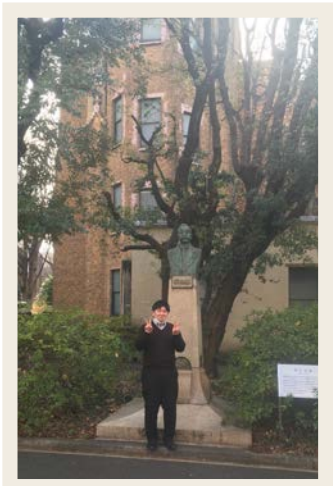
dss.csis.u-tokyo.ac.jp

ワタシのオシゴト 第178回

RELAY COLUMN

医学部学務チーム
(学部担当) 伊藤直生

仕事と日々の生活と



くもり空の医学部本館裏

透き通る空と全く通らない鼻。マフラーを手離せなかった季節も終わり、今ではティッシュが必需品の季節になりました。次の学内広報が発行される頃には、晴れやかな鼻になっているといいな、と思います。

僕の所属している担当では、主に学部学生のカリキュラム・学籍に関することを扱っています。医学部では学生の試験などのイベントごとの運営を行う場面が多く、「大きじ3の事前準備と小さじ1の当日の頑張り」くらいの配分になるように心掛けています。そういえば、最近唐揚げを作っていて、2つ気づいたことがあります。1つは小さじ1の量が意外にも多いということ、もう1つはそれより遥かに大きじ3の方が多いということです。

これまで、頼りになる先輩・上司の皆様のおかげでただきつつ仕事をしてきました。入職して丸2年が経とうとしている今、日々の様々なことに思いを向け、あらゆることに一貫して通用する考え方・心構えを身に着けていければ、と切に思います。

1年半前に
行った好きな
コント師
のライブ

得意ワザ：居酒屋での料理のチョイス

自分の性格：気分屋

次回執筆者のご指名：園田竜也さん

次回執筆者との関係：よくご飯を食べに行きます

次回執筆者の紹介：とても素晴らしい方です

デジタル万華鏡

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

農学系事務部総務課
第21回 図書チーム図書情報担当係長 近藤真智子

デジタルの中の癒し

「農学生命科学図書館デジタルアーカイブ」(以下、農図アーカイブ)では、所蔵資料のうち大学院農学生命科学研究科・農学部(以下、農学部)の歴史を語る資料や、図版が美しい農学関係の資料のデジタル画像をweb上で公開しています。

昨年12月には、明治・大正時代に作成された植物図譜10点を追加しました。このうち「莎草類彩色圖」など手書きの図譜3点は農学部の前身校で模写されたもので、デジカメやコピー機がなかった時代に熱心に研究した学生の姿が目に見えます。



「群芳圖譜」収録 楊貴妃

また、今回追加した10点はいずれも図版の色彩が鮮やかに残っており、絵画としても楽しめます。好きな植物の図版をプリントして額に入れて飾ったり、パソコンの壁紙にするのもお

すすめです。なお、農図アーカイブの掲載資料は印刷物やオンラインでのセミナー等でもご利用いただけます。その際は農学生命科学図書館の蔵書であることを明記してください。

農学部ではこの他にも様々な資料をweb上で公開しています。「東京大学学術資産アーカイブズリンク集」で農学部の資料を検索すると、林業の行政史料(政治・歴史学)、植物標本(植物学)、演習林の水文・水質データ(水文学)、演習林に集まる鳥の写真(生態学)、昔の農機具(機械工学、本誌no.1542の当欄で紹介)といったバラエティに富んだ資料群を見ることができます。農学部は自然科学から人文社会科学まで幅広い研究対象を持ち、一つの学部で総合大学のようなと言われますが、この検索結果はそれを反映したものであるでしょう。

コロナ禍でストレスの溜まる日々が続きます。たまには鳥の写真や植物の絵をのんびり眺めてみてはいかがでしょうか。農学部では森林や農村風景の癒し効果についても研究していますが、フィールドにとどまらずアーカイブの中にもその効果はあるかもしれません。

<https://iif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/agriculture/page/home>

インタープリターズ・第163回 バイブル

カブリ数物連携宇宙研究機構教授
科学技術インタープリター養成部門

横山広美

女性のいる大学へ：変化の躍動

東京オリンピック・パラリンピック元会長、森喜朗氏の女性蔑視発言は大きな問題になり会長交代に至った。ようやく日本でも許されず、こうした動きにつながるようになったと思うと同時に、問題発言の際に「笑い」が起きたという報道が気になった。著者自身、昨年だけで2回、省庁の学術関係審議会で女性について発言した際に「笑い」を経験したからだ。ひとつはそんな大したことない問題という嘲笑、ひとつは緊張がゆるんだ笑いだった。半数近くが女性になったとはいえ審議会の場でこうした笑いが起きるのは、ジェンダーの問題が深刻な議論の枠組みに載っていないことを象徴している。後者では、審査を受ける10数名がすべて男性であったことも影響しているであろう。「女性のいない民主主義」で前田健太郎氏が指摘するように、いないことの負の影響は大きい。

私はこの3年半、「数学や物理学に女性が少ないのはなぜか」という研究をしてきた。理系の中でも、機械工学等と並び、数学や物理学は極めて女性が少ない。本学でも大学院で3%程度である。従来は就職のイメージがないことや、ロールモデルが問題視されていたが、我々のグループは、女性は数学ができないといった間違ったステレオタイプや、女性が知的であることに否定的な人ほど、数学や物理学に男性イメージを持つことを明らかにした。つまり、こうした分野から女性を排除する男性イメージの形成に、その人の持つ女性蔑視の意識が強く影響していることを確認したのだ。予想していたとはいえこの結果は衝撃であった。共同研究をしている教育経済学を専門にする男性が、ジェンダーの問題から見ると、従来の議論から見えなかった、新たな真実が明らかになり大変面白いという。多くの男性研究者にも参加してほしい。

社会の問題を率先して解決していくのは大学の役割である。卓越大学院FoPM(変革を駆動する先端物理・数学プログラム)では、ダイバーシティセミナーを必須とし、今年度から実施した。多くの学生が真摯に考える様子をレポートで確認できたことはよかった。しかし根強い蔑視を持つ人もいる。まずはバイアスに気づき、認めること。間違った知識を正し行動につなげる。カブリ数物連携宇宙研究機構は、会議主催の際の女性割合をチェックし、人事審査の前に担当教員がバイアステストIATを受講することになっている。組織として取り組むことは多くある。4月から本学にも大きな変化が訪れると耳にする。ダイバーシティにまつわる冬の時代が終わり、新しい春を迎えることに大きな期待を寄せている。

専門知と地域をつなぐ架け橋に

FSレポート!

第11回

教育学研究科教授 小玉重夫

飼いや慣らされない主体性を育む場

2019年度と2020年度の2年間、体験型活動ワーキンググループの座長として、フィールドスタディ型政策協働プログラムの運営に携わってきました。この2年間の活動を通じて、本プログラムの意義と可能性がくっきりと浮かびあがってきているように考えています。それは、飼いや慣らされない主体性を培う場になっているということ、そして、社会に対する上から目線から脱却した、新しいタイプの東大生の登場を促す場になっているという点です。

飼いや慣らされない主体性というのは、周囲からの目や評価を気にして主体性を取り繕うような飼いや慣らされた主体性ではなく、他者との応答的な関係性を意識しながら、自らのイニシアチブで活動するような主体性です。そして、「上から目線」からの脱却という点ですが、もともとそういう学生が参加してくるという側面と、自治体との交流を通じて学生自身が変わっていったという面の両方があると思います。課外活動なので、上からではなく斜めから社会を見ている層の東大生をマグネット的に吸引するプログラムになっているという点も重要です。自治体と東大生という2つの層がつながることで想定外の関係変容がもたらされることがこのプログラムの可能性であり、東大からの自治体変革と、自治体からの東大変革が双方向的に往還している点が特徴です。

このように見えてきますと、本プログラムは、東京大学と社会との間の新しい関係形成を促していくものであるということが出来ます。従来の東大と社会の関係は、垂直統合型、ツリー型の社会構造においてトップダウンの位置にあるものとして位置づけられていましたが、それが、地域を主体としてそれらが横につながる自律分散型、リゾーム型の社会構造を架橋するコーディネーターとしてのそれへと転換しつつある、その担い手が育成される場に本プログラムが位置づくと思います。その意味で、本プログラムは、社会変革を駆動する東大の新しい姿を象徴するものになっていると実感しています。



2020年2月29日、鳥取県湯梨浜町への視察の様子

www.u-tokyo.ac.jp/ja/students/special-activities/h002.html

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles) に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
2月12日～3月5日	広報戦略本部 社会科学研究所、東洋文化研究所、情報理工学系研究科 情報基盤センター	理論を現実に。研究を社会に還元し「同一労働同一賃金」を提言 定説を疑え。イスラーム美術をひも解き、新たな事実を発見 分散コンピュータの性能を最大限に引き出すソフトウェアを開発 ないものは、作る。量子物理における数十年来の予言の検証へ / UTOKYO VOICES
2月12日、3月5日	広報戦略本部	AI解析でインフラ点検を簡単に 水を使い「グリーン」な宇宙開発を後押し / Entrepreneurs
2月12日	本部保全課	(本郷) 赤門の閉門
2月15日	本部国際戦略課	Tokyo Forum 2020 Online の当日の様子を1時間に凝縮した番組が放送されます
2月16日	本部入試課	合格者発表方法の変更について
2月16日	本部広報課	令和2年度・令和元年度退職教員の最終講義 3月開催分のお知らせ
2月17日	生産技術研究所、モビリティ・イノベーション連携研究機構	柏の葉地区を走る自動運転バスが新しい車両になりました
2月17日	本部学術振興企画課	東京大学人文社会科学振興ワーキング・グループ最終報告書を公表しました
2月17日	附属図書館	総合図書館デジタル化資料が世界的なデジタルアーカイブと連携
2月18日	本部広報課	令和2年度 退職教員の紹介
2月22日	広報戦略本部	東大生のSDGs認知度は87%に上昇 TSCP学生委員会が第2回意識調査の結果を発表
2月22日	薬学系研究科・薬学部	二種類の異なる分子骨格を作り出すポリケタイド合成酵素の発見
2月22日	本部協創課	Beyond AI 研究推進機構発足記念シンポジウムを開催しました
2月25日	グローバルリーダー育成プログラム推進室	GLP-GEFILプログラムの第4回オンライン修了式を施行しました
3月2日	グローバルキャンパス推進本部、本部国際戦略課	IARU学長会議に五神総長が出席
3月5日	本部施設企画課	「(仮称) 赤門脇トイレ」デザインコンペティションの実施概要と審査結果
3月5日	本部人事企画課	「令和2年度東京大学卓越研究員(公募型)」7名を決定
3月8日	本部社会連携推進課	オンライン特別講義シリーズ「東大吉本対話」vol.1 ～言葉力が世界を変える?～ の実施
3月10日	教育学部附属中等教育学校	教育学部附属中等教育学校で第22回公開研究会が実施される
3月10日	本部国際戦略課	Tokyo Forum 2020 Onlineの当日の様子を特集した番組が国際放送されます
3月10日	本部入試課	令和3年度前期日程試験及び外国学校卒業学生特別選考合格者発表
3月10日	本部入試課	令和3年度学部入試合格者(前期日程試験、外国学校卒業学生特別選考)の皆さんへ(手続のご案内)
3月11日	本部奨学厚生課	大学入学準備のための教科書購入や住まい紹介等についてのお知らせ
3月11日	グローバルキャンパス推進本部、本部国際戦略課	ブリティッシュ・コロンビア大学ー東京大学「UBC-UTokyo Presidents' Talk」を開催しました
3月12日	本部広報課	広報誌「淡青」42号を発行しました



CLOSE UP 広報誌『淡青』42号を発行(広報室)

広報室が丹精をこめて年に2回発行している広報誌『淡青』の最新号ができました。今号の特集は「五神総長の6年と東京大学」。2015年から東大を牽引してきた総長がいま6年間の任期を終えようとしています。初めて実現した総長×次期総長の特別対談、6年間の主な出来事クロニクル、部局を代表する100研究者の直筆格言集、学外有識者による忌憚のない評価コ

メント……。浮かび上がるのは、社会変革を駆動して人類と地球の未来に貢献する知の協創の姿です。特集の後は、データ駆動型社会の行方を俯瞰します。ネット濫用の懸念に対して「個人情報上手に扱えば公共に役立つことを日本人はもう知っています」など、ネット社会をリードしてきた方の思いに心打たれます。ぜひご一読を!

表紙は総合図書館です



令和3年度 学内広報 配布スケジュール	1545号	1546号	1547号	1548号	1549号	1550号
	4月28日	5月31日	6月30日	7月30日	8月31日	9月30日
	1551号	1552号	1553号	1554号	1555号	1556号
	10月29日	11月30日	12月24日	1月31日	2月28日	3月31日



CLOSE UP

又吉直樹さんと佐藤健二先生が安田講堂で対談 (本部社会連携推進課)



MCはしずくの村上純さんが務めました

3月7日、吉本興業株式会社とのオンライン特別講義シリーズ「『東大吉本対話』Vol.1 言葉力が世界を変える?」が開催され、大学執行役・副学長の佐藤健二教授と、吉本興業所属のピース又吉直樹さんが、「言葉力」をテーマに対談を行いました。

安田講堂からライブ配信されたこの対談では、言葉の使い方に始まり、スマートフォンやSNSからひも解くコミュニケーションの本質や、現代において我々が持つべき「言葉力」について、

論文やコント・小説を書くそれぞれの立場から意見が交わされました。視聴者からの質問を受けるコーナーでは、「3密」といった現代の流行語に関する言及もあり、1時間の対談は大変盛り上がりしました。

今後、本学と吉本興業は、「笑う東大、学ぶ吉本プロジェクト」を立ち上げ、持続可能な新しい価値の創出と未来への提言を目指して、学術とエンターテインメントの積極的な対話、協働を推進していく予定です。



CLOSE UP

柏で運行実証実験中の自動運転バスが新車両に (生産技術研究所ほか)



いすゞ「エルガミオ」をベースとした自動運転バス

柏市柏の葉地区では、柏ITS推進協議会の主導のもと、2019年11月から柏の葉キャンパス駅～柏キャンパス間で自動運転バスの長期営業運行実証実験が行われています。東大からはモビリティ・イノベーション連携研究機構、生産技術研究所および新領域創成科学研究科がこの実証実験に参画しています。

このたび、この実証実験で運行されているバスが、新しい車両になりました(定員は28名ですが新型コロナウイルス感染症拡大防止のため当面は15名)。引き続き長期営業運行実証実験へ参画し、自動運転を活用したモビリティによる移動サービスの社会実装に向けて研究活動を進めていきます。

コロナ禍 vs 東大 Now 新型コロナウイルス情報WG発

第4回/コロナ禍下のキャンパス内のアクティビティ

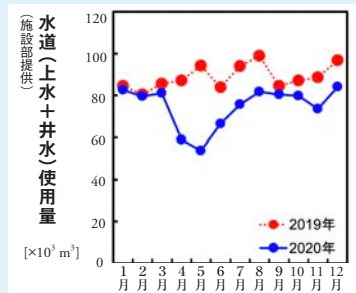
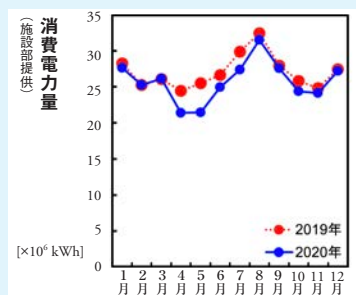
中国から始まったコロナ禍がわが国に本格的に及んだのは、早や1年前のことになります。それは、全キャンパスにおける厳しい活動制限の断行を意味しました。では、コロナ禍下の2020年、構内での研究・教育活動の状況はどのように推移したのでしょうか。前回に引き続いて、キャンパス内のアクティビティを数量的な指標でみてみましょう。

上のグラフは東京大学の全キャンパスでの消費電力量、下のグラフは同じく水道使用量の推移を示したものです。2019年と比べると、どちらも2月までは前年とほぼ同様に推移しているのに対し、緊急事態宣言が初めて発令された4、5月に顕著に低下しており、水道

使用量に至っては半分近くにまで急減しています。水道の使用は実際に構内にいる人員の活動を直截に反映するので、その激減は活動制限の徹底を示していると考えられます。しかし、その時期を底として、6月以降は急速に回復したことがわかります。

第三波とされる11月以降、どちらの数値も再び減少していますが、第一波の時と比較するといずれも減り幅は小さく、Aセメスターにおいては、キャンパス内での研究・教育活動が感染拡大の影響を受けにくくなっていることを示すものと考えられます。活動維持への構成員の努力が窺われます。

(杉山清彦/総合文化研究科・広報室副室長)



※「学内広報」では広告掲載を受け付けていません。出稿を検討したいという皆様のお問い合わせをお待ちしております。↓本部広報課(03・5841・2031)



「3密」からハコの外へ

韓国の大学で教える元指導学生のすすめでKF94マスクを使うようになった。その安心感たるや、それまで愛用していた不織布マスクがいささか心もとなく思える。そこでこれを標準装備する韓国と、規格が曖昧な日本の違いは何であるのか考えてみた。

マスクに対する感覚の違いは、それを着用してどのような関係を作ろうしているかの違いかもしれない。韓国で長年フィールドワークを行ってきた経験からいうと、この国の人たちは社会的・身体的距離の遠近に敏感である。実際、コロナ防疫として「コリトゥギ」(距離をとること)という言い回しが定着し、人と会うことについても「5人以上の私的集まりの禁止」といった直截的な話法で通じるようだ。距離が関係に織り込まれており、関係を生身の人同士の距離として直接的に認識・想像できるのだと思う。標準化された対策を個人レベルで取れるのはそれゆえか。

これに対し日本では、「3密」という空間的な比喩を用い、人をいわばハコのなかに入れることで、初めてすっと腑に落ちる。関係を距離でなくハコとして捉えることのリアリ

ティは、研究室や医局が単なる物的な空間ではなく、集団(箱の中身)や役割・アイデンティティ(箱書きのようなもの?)と不可分であることを思い浮かべればよい。マスクの作法もハコ次第である。逆にハコに入っていない人たち(ならびに物的空間と集団のすき間に居あわせる人たち)の関係は曖昧になる。キャンパスの感染予防対策でも、ホールや談話スペースなどハコとして想像しにくい、箱書きもないような場所での人の交わりには、比較的配慮が少ないように思える。

今、研究・教育の現場で切実に不具合を感じるのが、教室(オンライン会議室)というハコの外での、何気なくも情動的な交流の不足である。4月からの新学期はおそらく前年度よりハイブリッド授業の比率が高まり、キャンパス内外の人出も多くなるであろう。隣国に思いをはせつつ、ハコの内外を貫く関係づくりに今一度想像をめぐらせてみてはいかがだろうか。

本田 洋
(人文社会系研究科)

